XVII

ヨオロツパの世紀末

瓦礫の中

集英社

吉田健一著作集 第十七卷
ヨオロッパの世紀末　瓦礫の中
昭和五十五年一月十日　第一刷印刷
昭和五十五年二月四日　第一刷發行
著者＝吉田健一
發行者＝堀内末男
發行所＝株式會社集英社
東京都千代田區一ッ橋二丁目五番地一〇號
電話＝東京（二三〇）六三六一〈文藝出版部〉
　　東京（二三八）二七八一〈販賣部〉
製版所＝株式會社中臺整版
印刷所＝大文堂印刷株式會社
製本所＝株式會社石橋製本工場
© 1980 Nobuko Yoshida, Printed in Japan
0395-171017-3041　落丁本・亂丁本はおとりかえします

吉田健一著作集 第十七巻 目次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ヨオロッパの世紀末　五
瓦礫の中　二三
解題　三七五

ヨオロッパの世紀末

I

先づ廻り道をすることから始める。

ヨオロツパといふ一つの文明の歴史を振り返つて見るとヨオロツパがその性格を完成し、我々がヨオロツパといふものと結び付けて考へる各種の特徴を凡て備へるに至つたのが西暦で言へば十八世紀であることを強く感じる。これはヨオロツパにゐる人間が行ふ精神活動の各部門での發達がその後に止つたといふことでは勿論なくて、寧ろヨオロツパといふことで直ぐに我々の頭に浮ぶ政治上の制度と科學が我々にとつて馴染みの、或は我々が馴染んだ積りでゐる形を取つたのは十八世紀よりも先のことである。併し例へば政治の面では、もし政治上の形態といふものに對するヨオロツパの寄與が今日では民主主義といふやうな名稱で呼ばれてゐる代議制であるならば、英國やオランダの議會政治は十八世紀に既に他の國々によつて龜鑑と見做される程度に確立し、十八世紀の英國の議會政治が今日の日本と同樣に腐敗の極みにあつたこともその確立の證據になるものであり、その後の改善は發達であるよりもこれは常識的な是正に過ぎない。

科學に至つては十八世紀を待たずに十七世紀の後半にホイゲンス等の研究でデカルトの幾何學的な宇宙が力學的な宇宙で置き換へられ、光の早さが測定され、誰でもが知つてゐるさうした業績を列擧

するよりもその業績に卽して、これは我が國では餘り取り上げられない事件であるが、古代と現代の優劣に就ての論爭が解決した。これは要するに古代、或はギリシヤ、ロオマの時代と比べてその後のヨオロッパが文明の點で優れてゐるか劣つてゐるかといふ、ルネッサンスで古代の世界が再び發見されてから何かの形で續けられて來たもので、例へばそれが文學ならばラシイヌやモリエェルとギリシヤの劇作家達とどつちがいいかといふことになり、これは意味がないことであつても科學では或る物體よりも六倍の重さがあるものがその物體よりも六倍の早さで落下するかどうかといふやうなことは實驗するだけで明白になる。既に十七世紀の末にこの古代と現代の問題が現代に有利に解決したのであるから少くともヨオロッパは言はばヨオロッパとしての自覺があつて十八世紀を迎へたのである。

この論爭がフランスでその最終的な形を取つた際にその主な材料になつたのは文學だつた。そして傑作を比較してそこに差を付けるのは傑作、或は文學といふものの定義そのものに反してゐても、例へばフォントネルが古代の文學に對して擧げたラシイヌやモリエェルが明確にヨオロッパの文學と呼べるものであることは認めなければならない。それではギリシヤ、ロオマの文學がヨオロッパのものではないかどうかを言ふ前に、このことに具體的な手掛りを與へる爲に、却つて話が飛ぶやうであつても、日本でも普通に行はれてゐる古典主義と浪漫主義に就てここで改めて考へて見る必要がある。今までの定說に反して實際には古典主義よりも先に浪漫主義があつた。ヨオロッパの文學史の上で或る一定の傾向が現れてそれが殊に顯著になり、これに名前を付けなければならなくなつた時にそれがこの傾向の原因になつた事情から物語風、或は浪漫主義と呼ばれ、マリオ・プラズがその「浪漫主義の臨終」で指摘してゐる通り、浪漫主義が或る段階まで來てそれ以前の時代に對する憬れが生じてこ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

れに別な名稱を與へることが必要になつたのが古典主義である。

ここで古典は今日では一般に用ゐられてゐる傑作といふ意味ではなくて古典主義の古典がギリシヤ、ロオマの文學に相當する。現に自分達がしてゐる仕事、及びその世界に憧れるといふことはない。ギリシヤ人やロオマ人にとつて古典主義の古典がその彼等の世界だつたので、彼等が詩を論じ、文學に就て語つても古典主義などといふのはその語彙になかつた。この言葉の語源になつてゐるラテン語が最初に出て來るのもロオマ文學さへもがその終焉に近づきつつあつた二世紀のことである。併しその彼等の文學はどういふものだらうか。これは大變な問題のやうであるが、古代と現代の論爭の分類に從つて古代以後の文學とギリシヤ、ロオマといふ風に考へるならば、その參考になる範圍で彼等の文學の輪廓を描くのはそれ程困難なことではない。それには彼等の文學とその後のことに屬するヨオロツパの文學の間に何か異質のものを感じるといふことがあるかないかが一つの手掛りになる。

文學といふのはそれを書いたものがどのやうなことを考へ、それが書かれた時代のものがそれをどう受け取るのだらうと言葉といふものの性質から書いてあることに別な意味を讀み込み、そこから違つた色彩を生じさせることが出來て、言葉が言葉であることを失はない限り、それが必ずしも曲解、或はこじ付けとは言へず、一つの作品が或る時代から次のへと讀み繼がれるのも一つには言葉にそれだけの幅、或は奥行きがあるからである。併し同じく言葉が言葉であることによつて、又言葉である爲にも、そこに初めからなかつたものを見出すことは許されないので、その作者の聲とともにそこにあるものが我々に傳はり、ギリシヤ、ロオマの文學でもそれが文學である上では先づそこに我々はその作者達の聲を聞き取り、その響きは我々が字面だけからの勝手な讀み方をする餘地を殘さない。さ

ういふ響きにあるものがその言葉であつて、人間が人間の言葉に接して勘違ひする心配はないのである。

一括して言つてしまふならば、ギリシヤ、ロオマの文學には後めたさといふものがない。それはギリシヤ人やロオマ人が反省するなどといふことがなかつたといふことではないが、その反省する自分といふものの正體が解らなくなつたり、自分と呼ぶに堪へない忌しいものになつたりするといふのは彼等の間で見られないことだつた。彼等の精神の透徹した働きが自分といふものを限なく點檢することがあつて人間にとつての自分といふものがそこに確かに生きてゐる感じがしても、それは彼等にはその通りに生きてゐて忌しいものでも疑しいものでもなくて、そこにそれがあることは地中海の日光を浴びた白い大理石の柱が土に眞黑な影を投げてゐるのと同じだつた。いつも自分がゐて嘆き、悲み、或は喜び、愛し、憎み、それで自分の眼の前にある景色もそこにあるからペロップスの土地の全部もお前の愛には換へられないとテオクリトスとともに言ひ、ルキアノスが冥土で見るヘレナの白い頭蓋骨は自分も何れはさうなるから死は恐しいものなので、ルクレチウスの哲學での神々は人間のことなど無關心に存在してゐるのであつても神々とかうして緣を絕たれてのた打ち廻る人間が人間でなくなるのではなかつた。

これが古代といふものであつて、それはヨオロッパの人間が彼等の古代と考へてゐた通りのものでもある。ルネッサンスに相當する英國のエリザベス時代には古代のロオマ人にも似たとか、ロオマ人にも恥ぢることがない死に方とかいふことがよく言はれて、それが自殺に就てのハムレットの臺詞をそのまま受け入れてもゐた人達の間でのことだつたのを思ふならば、例へばプルタルコスの英雄傳に

再びそれに接することを得たルネッサンスのヨオロッパの人々がどれだけ大きな魅力を感じたか解る。それは彼等には許されない行爲が常識であり、倫理でもある世界だつたから魅力になつた。ここでもう一つだけ古代から例を引くならば、ユウリピデスのメデアは女が男に對して不當に差別を付けられてゐるのに抗議するのに、自分達は戰場に赴かなければならないのだといふのが男の口癖であるが、そんな戰ひに三度出る方が子供を一度生むのよりも增しだといふ風に言つてゐる。そこには女といふのはみじめなものでといふ種類の愚痴が全く見られない。それは古代の人間にとつて自分が人間であつて自分といふ人間であることが餘りに明かだつたのと同樣に女も紛れもなく女といふものであり、それを女から奪へないといふ確信であるよりも認識があつて制度や風習の上での不備を別とすれば、女も男と對等にその立場を主張することが出來たからである。

マクベス夫人もダンカン王を殺すやうにマクベスを勵す時、自分も子供に乳をやる喜びを知つてゐるが、もしさうする必要があると思ふならばいつでもその子供の頭を壁にぶつけて碎いて見せると言つてゐて、この臺詞とメデアのを比べることで古代の文學とその後のヨオロッパに屬する文學の違ひがかなりはつきりする。マクベス夫人も强い語氣で意見を述べてゐても、それは自分が女であることを止めた上でのことで、自分が女である自分でなくなることで一層の烈しさがその言葉に加るとともにこの分裂から生じる後めたさにしまひには夫人も勝てなくて例の、アラビア中の香水を持つて來てもこの自分の手から血の匂ひを消し去ることは出來ないと呟く夢遊病患者で終る。この暗さはどこから來るものだらうか。マクベス夫人が惡事に加擔するからなどといふことは意味をなさなくて、ユウリピデスのメデアがどんなことをするかはここで改めて言ふまでもない。そして何かの形でこの暗さ、

或は一種の後めたさは日本の我々もがヨオロッパの文學と考へてゐるものに付き纏つてゐて、その文學の性格を摑むには次にはこの暗さを取り上げなければならない。それは殆どヨオロッパの文學を定義するものである感じさへする。

或はそれがギリシヤ、ロオマの文學に加へられたのである。この二つの源泉を離れて言はば單獨に發生し、後にヨオロッパの文學に合流したスカンヂナビア、ケルトなどの遺產を思ふ時、それがヨオロッパの文學に與へたものが餘りにも素朴な要素に終り、それ自體にどれだけの價値があるのか、例へば英國に渡つて來たサクソン人が書いたものが文學であるかどうかも疑しくなる。明かにギリシヤ、ロオマ以後の文學、從つてここで言ふヨオロッパの文學と認められるものは先づ新約聖書、プロティノスの哲學、或はアウグスチヌスの神學のやうに古代と同じくギリシヤ語、或はラテン語で書いてあつてもそれが他にこれに代り得る程度に發達した國語がまだなかつた爲のもの、そしてそれに續くのが中世紀といふ人間の精神活動が主に文學とは別なことに向けられてゐたかに見える時代を通して次第に芽生え、今日の日本では一般にそれがヨオロッパの文學と考へられてゐるヨオロッパ各國の作品である。

ダンテ、チョオサア、ヴィヨンなどのものがそれで頭に浮ぶ。前に暗さといふことを言つたのは或は必ずしも妥當ではないかも知れないが、古代にはなかつた暗さ、古代以後のヨオロッパにはない明るさといふものを適宜に言ひ表すのは難しい。ダンテの「神曲」の地獄篇にどれだけ陰慘な場面が出て來ても、單に陰慘な事柄といふだけのことならばそれに匹敵する例を幾らでも古代の文學から引くことが出來る。併し「神曲」の天國篇を滿してゐる光はアルカディアの高原に差してゐたのと違つて

ゐて、もし古代がその後の時代に及ばないものがこの天國の光にあるならばそれは影である。このことはギリシヤ語やラテン語に遲れてヨオロツパで發達した國語で書かれた最初の傑作と言へる「神曲」を例に引いただけでは或はそれ程明瞭ではないかも知れなくて、チョオサアの「カンタベリイ物語」のパラモンとアァシタの話でこの二人の友達が何れもエミリアの美しさに打たれて感じるのが戀愛の情なのか、自分達の友交が破綻を來したことに對する痛惜の念なのか解らなかつたといふやうな戀愛の描寫が古代の文學にないことを指摘するにはその爲に擧げなければならない資料が多過ぎる。

併し例へばヴィヨンが母親に代つて歌つたことになつてゐる詩があつて、この詩まで來ればヨオロツパの文學の暗さといふものがこの傑作でもその根柢をなすものといふ具體的な形を取つて我々の前に現れる。ヴィヨンの母親は文盲であるから彼が代つてこの詩を書くのであるが母親は教會に行つてそこの扉の一方に地獄の繪が書いてあるのを見て恐怖を感じ、一方に天國の繪があるのを眺めて自分も救はれることを望む。そこで歌はれてゐることの趣旨を言へばただそれだけのことであるが、一人の人間が自分といふものの所在が解らなくなるまでに何か他のものの前に立たされ、それが自分といふものが賭けられてゐるからこそなのだといふことの强烈な、或は鮮明な印象は恐怖といふ言葉が當時の綴りで paour と書いてあるのが記憶に刻み付けられる位である。その不安のうちに人間の像がくつきり浮び上るとでもいふのだらうか。兎に角、不安なのが自分なのだといふ感じが間違ひなく傳はつて來て、その人間がそこにゐるといふことのこれに增す保證はない。

キリスト教が東方に向ふ代りに西の蠻族の間に廣められたことがこの宗教の性格にどのやうな形で影響したかは解らないが、今日殘つてゐる中世紀の僧侶達の說教では信徒の肉慾を抑へる爲に女の美

しさを否定したものと、同じく抽象的な觀念に緣がない野蠻人に地獄の責苦を廻つて永遠といふことを敎へるものがその力の籠り方で我々を打つ。一例を擧げれば或るものは永遠といふことに就て、假にどこかに砂の山があり、千年に一度だけ一羽の小鳥が飛んで來て砂の一粒を啄へて他所の平地に運び、又千年たつて又一粒をそこに移し、これを繰り返してゐるうちにもとの砂の山が消えて他所に新たにそれが築かれるまで人間の魂が地獄で苦み續けてもそれは永遠を前にしては一瞬に過ぎないと言つてゐる。これは我々が今日の敎會で聞く種類の說敎とその性質が違つてゐて、その成果はヨオロッパで人間の魂といふものの不滅と永遠の地獄の責苦といふ二つの觀念を確立したことにあつた。

さうすると自分といふものが面白いことになる。それだけ明確な形を與へられた永遠の前に立てば自分といふのはどこかに行つてしまつてもよささうなものであるが、その永遠がそのやうに明確なのは自分の苦痛がその永遠だからであつて、このことはその苦痛を免れる爲に絕えず自分を監視してゐることの必要とともにいやでも人間を自分の點檢に向はせないではゐない。イエスの考へでは女を見て色情を覺えることが既に姦淫の罪を犯すことだつた。そして自分を點檢するなどといふことには人間の精神の構造からして限度があり、恐らくはキリスト敎といふ宗敎の立場に卽すればその先に信仰の問題があるに違ひないが、そのことを考慮に入れても否定出來ないのは人間に自分といふその內面に氣付かせるやうに人間といふものの歷史の上で曾てなかつたと言へる壓力が加へられるのが何世紀か續いたことで、當然これは宗敎の問題に止るものではなかつた。

人間が自分の內部を覗いてそこで行はれてゐることに注意するといふのは永遠の責苦といふ種類の刺戟があつて始めて人間が本氣でそれをやることで、その結果は自分を見失ふに至ることに他ならず、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com